セブンス・ブロード　萌えの探求者

月見里　御祓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セブンス・ブロード　萌えの探求者

【Ｎコード】
Ｎ２４３２Ｖ

【作者名】
月見里　御祓

【あらすじ】
バリスラン共和国王子である、エンディ。彼は国中に響き渡るほどの変人として有名だった。
そんな彼が行商から「萌え百科事典」という本を購入したの事の始まりだった。彼はその本に書いてある事を研究すると言い出した。
どんなに変人でも彼は一国の王子。簡単にフィールドワークの許可が下りるはずがない。
そのため彼は城の地下に眠る聖剣を利用する事を考えた。

プロローグ

穏やかな昼下がり、大量の本棚の置かれた書斎の隅を陣取り、壁に背を預け本を読みふける少年の姿があった。彼の名はエンディ・ウル・バリスラン。年は十五歳。短く切られた黒い髪と、黒い瞳。端整な顔立ちをしているが、その表情には全く毒気を感じられない。おどけている訳でなく、真剣な訳でもない。自然体。そんな言葉がしっくりとくる少年である。

シンと静まりかえった室内。紙の擦れる音のみが響く。

コンコン。と、扉をノックする音。

「いいよ」

エンディは本に目線を落としたまま返事を返す。

「エンディ様、昼食の準備ができました」

ガラガラを料理の載せられた台車を押しながら部屋に入ってきたのは給仕服を着た少女だった。少しクセのある、セミショートの栗色の髪。いつもにこやかなその表情は、ギスギスした空気でも和ますことの出来る。そんな雰囲気を持っている。彼女の名はエリス・ラングレー。エンディ専属のお世話係である。エンディとは同い年で、幼なじみでもある。

「うん。その辺に置いておいて」

エリスの方を見向きもしないで答えるエンディ。もう、慣れた事だが、不満そうな目線をエンディに送る。

「何を読んでらっしゃるのですか」

不満なのか、拗ねたようにエンディに訊く。

「昨日行商から買った稀少本」

気になったのか、エリスはエンディの元に歩み寄り、上から本を覗き込んだ。

「何ですか…コレ」

エリスの表情が凍り付く。そこには色々な服を着た女の子のイラ

ストが描かれていた。中にはかなり際どいものまで。
「スゴイだろ。異界の本だって」
まるで、子供が自慢話をするような感じで、エンディは誇らしげに語る。
「エンディ様。こんないかがわしい本を読んだらだめです！」
数秒間凍り付いていた、エリスの表情が氷解した直後、今度はマグマのように真っ赤な顔をして、エンディの本を取り上げる。
「いかがわしい？何で？」
本当に不思議そうな顔で、エリスの顔を見つめる。
「だって、こんな見た事も無い文字で…女の子が…ってか、何の本なんです。コレは！」
そう、真正面から訊ねられるとエリスは狼狽する。ペラペラと、本のページを捲りながら、内容を確認する。確かに健全とは言い難いが、それほど過激な内容でもなさそなのだ。エリスは言いあぐねたのか、話題を逸らしてきた。
「『萌え百科事典』って書いてある」
即答するデンディ。
「って！読めるんですか！異界の本が！こんな文字、見た事ないですよ」
「日本って国の文字だよ。漢字があるから、中国語に似ているけど、ひらがながあるから間違いないよ。これ以外にもいろいろな本を持ってるから解読したんだよ。ほぼ完璧に読み書きできるよ」
「何か、才能を無駄使いしている気が…」
エンディという人間は一言でいうと、好奇心の塊だ。知らない事、興味のある事を見つけると、異常とよべる集中力でそれにのめり込む。実際頭がよく、器用なので、すぐに知識や、技術を自らのものにしてしまう。ついでに、拘らないので今回のように他人に理解されない物にまでのめり込む。なので皆に変人扱いされている。
そんな周りの風評などつゆ知らず、いや、知ったとしても自らのペースを崩す事は無いだろう。

「そうかな？」
「えっと…エンディ様…こういうのが趣味なんですか？」
エリスは、頬を薄紅色に染め、人差し指同士をくっつけて、モジモジしながらエンディの顔色を伺う。
「趣味？…どうだろう？書いてある事は分かるけど…この萌えって言葉の意味が今ひとつ分からないんだよ」
「そうですか…」
エリスはよかったと安堵の溜め息を漏らす。
「そうだ！決めた！」
「何をです？」
この男のこういう提案は、十中十。ハッキリ言って百パーセントろくなものでは無い。しかし、訊かないわけにはいかないと、エリスは半ば、諦めたように訊いた。
「今度の学院の論文の題材。題名はそうだな…「萌え」について。分析と実態」
エリスはヨロヨロと三歩後ずさり、右手で、コメカミを押さえる。
「なんか…頭が痛くなってきた」
「そうと決まればフィールドワークの準備をしなきゃ」
エリスは鼻歌交じりに、部屋から出て行こうとするエンディの腕を掴む。
「まって下さい…フィールドワークって、何処まで行くつもりですか？」
「今回はクラバスまで行こうと思っている」
「って、世界の果てじゃないですか！それに、あんな野蛮な国に行く許可など、お父上がお許しになるはずがないでしょう」
グラバスというのは、この国から一番遠くにある国。未開の国で、かなり開拓の進んでいるこの国との国交は殆ど無い。その為、治安も悪くこの国の人間なら、大概の者が敬遠する。
「関係ないだろ？何処まで行くかなんて」
「限度があります。大体、何のためのフィールドワークなんですか

？」
「えっ、この本に書かれているような女の子を探しに行くんだよ。この本を読んでもどうもピンと来ないからさ」
『萌え百科事典』を手に取り、ペラペラとページを捲る。
「つまり、要約すると、可愛い女の子を捜すために諸国漫遊の旅に出ると」
絶対零度の冷く蔑む瞳で、エリスはエンディを睨む。
しかし、相手がエンディだと、それも効果が無い。
「別に可愛い女の子を捜すために行くんじゃないよ。この本に近い女の子を捜しに行くんだよ」
「…同じですよ」
徐徐に覇気の無くなっていくエリス。
「この本の中には亜人族の女の子もいるからさ。だから、取りあえずグラバスまでは足をのばさないと…」
「その為だけに…」
もはや、呆れるを通り越して、呆然と佇むしか、彼女には残されていなかった。
「いいだろ、別に」
悪戯を咎められた子供のように――というより、この男はまるっきり子供なのだ。
「ダメに決まっているでしょ！だって貴方は…」
大きく息を吸い込むエリス。エンディは咄嗟に耳を塞ぐ。
「この国の王子なんですからぁぁぁ！」
どこぞの指向性音響兵器にも勝るとも劣らない、大ボリュウムの音声がエンディの鼓膜を襲う。
「相変わらず堅いよな…エリスは」
耳を塞いでいたにも関わらず、三半規管を激しく揺さぶられ、フラフラと千鳥足のエンディ。そのまま、お約束のように足を滑らせ、エリスの均整のとれた中くらいの、まだ熟れていない固い果実のような胸に頭を埋める。

「はぁ！」
かけ声とともに、矢のような肘鉄が、エンディの脳天に打ち込まれる。
悶絶して床に膝をつき頭を抱えるエンディ。彼に対し、エリスは顔を赤らめながらも説教を続ける。
「当たり前です。第一王様が許可ならるはずありません！」
ようやく、痛みが引いてきたにか、エンディは頭をさすりながら立ち上がった。
「いってーなもう…。まあ、心配すんな。説得するための口上は考えてあるから」
鈍痛の残る頭を押さえながら、エンディはニッっと笑う。

翌日。エンディは城に出向いた。
城は、二百年前の初代国王が建設した者で、堅牢な要塞でもある。入る度に、馬鹿でかい門が開くのを待たないといけない。エンディはこの仰々しさがどうも好きになれない。
それが、あまり城に来たがらない理由でもある。
エンディは父であるデュラス王とは一緒に暮らしていない。城から十キロほど離れた離宮に暮らしている。その為、父親と顔を合わせるのは週に一、二遍程しかない。
王である父は多忙なため、早朝に出向いたのに、自分の面会が許されたのは昼過ぎ頃だった。順番に割り込む事位は訳ないのだが、エンディはそう言う事が特に嫌いなため、何時も律儀に順番を待っていた。
赤い重厚な絨毯のひかれた道を歩き、父の待つ謁見の間に赴く。
そこには父であるデュラス王が玉座に座っていた。
煌びやかな金髪と、碧眼。鋭い眼光は王者の風格を現している。
ちなみに、エンディの黒髪は幼い頃に亡くなった母親の遺伝である。
「お父様…今日はお願いがありまして、この場に参りました」

「何だ？また旅に出たいうんだろう？ダメだぞ。お前も私の後継者としての自覚を持て」「いえ、選定の儀を執り行う許可を下さい」
デュラス王は訝しむ顔をする。
「なんだと？」
「私も今年で十五になります。なれば、自らの器を試す機会を設けていただきたい」
自らの息子の決意。デュラス王は暫し考えた後、返事を返す。
「うむ、そう言う事ならいいだろう。許可する」
「ありがとうございます」
エンディはもう一度、深々を頭を下げる。

二日後、選定の儀式の準備が整った。
選定の儀。それは城の地下に封印されている選定の剣によって、世界の守護者たるか見合う者を餞別する儀式。
先代の守護者。このバリスランの初代王ガハラン・ウル・バリスランが使命を終えた時、城の地下に封印した。何時か来る危機のため。
この儀は、通例の手続きをすませ、王の許可があらば誰でもうけられる。
しかし、ガハランが崩御してから二百年が過ぎ、幾人もの騎士達が、選定の儀を受けた。しかしながらこの剣に見初められた勇者は、今だ現れていない。
エンディは、儀式の礼装用の甲冑を身に纏い、地下にある選定の間に通ず石造りの螺旋階段を下っていた。
「どういう風の吹き回しなんですか？」
立会人とし同行しているエリスがエンディの耳にささやく。エリスはいつもの給仕服では無く、深紅の騎士服を纏っている。彼女の出自は高位の騎士の家柄である。彼女自身、卓越した剣技を持ち合わせており、十五歳の若さで、デュラス王よりシュバリエの称号を受けている。元々、彼女の本分はこちらで、エンディの身辺警護を

一任されている。
「まあ、見ていれば分かるよ」
よほど心配なのか、一昨日からエリスはこんな質問ばかりしてくる。
一方のエンディの対応も決まっていて、微笑みながら、はぐらかすだけだった。

地上より三十メートル程下った。地中深く。細い螺旋階段を抜けたそこには、ぽっかりと、巨大な空間が広がっていた。その中心にある台座に両刃の剣が刺さっていた。
「行ってくる」
告げると、エンディーはゆっくりと歩みを進め、剣の塚に手をかけた。
「…エンディー様」
両手を合わせ祈るように見るエリス。
「そんなに緊張しなくてもいいよ」
エンディーは振り返り、エリスに微笑む。
「あの、エンディさま…」
「なんだい？」
「その手に持っているのって…？」
先ほどまで、台座に収まっていたはずの剣がエンディーの手に収まっていた。
「聖剣だけど？」

一時間後、謁見の間。
場は喝采というより、動揺が広がっていた。
国中のどんな英傑も抜く事が出来なかった聖剣が、王家の血を引いているとはいえ、変人奇人と言われているエンディーが抜くとは思わなかったからだ。
ただ、王だけは違った、自ら息子が為した偉業をただ喜んでいた。

「よくぞやった。そなたの父として、この国の王としてとても鼻が高い」
　エンディーは王の前に跪いていた、皆の視線がエンディ…というより、隣に横たえてある聖剣に向いていた。彼はそんな視線を全く気にかけていない様子せ、王に進言をした。
「父上。実は三日前、夢の中でお告げがあったのです。再び、ガーグルの連中が蘇ろうとしていると。そして、私がその脅威から世界を護る使命があると。そのお告げに従い、私は剣を抜きました。コレから私は世界を回り、残り六つの武具と、七色の宝玉を探す旅に出なければなりません。世界の終焉を食い止めるため。三百年前、我らが祖先、ガハラン・ウル・バリスラン王が成したようにこの世界の崩壊を止め、彼が為し得なかった魔神を討ち滅ぼすために」
「うむ…確かに、過去幾度と現れた魔神の出現と守護者の出現は重なっている。今、お前という守護者が現れたという事はそう言う事なのだろう…」
「では、父上、お許しいただけるのですか？」
「世界の安定は、国の平穏と同義だ…コレも国を導かねばならぬ王族の勤めならば致し方あるまい」
「見事使命を果たし、世界に平穏をもたらしてみせます」

　礼装を解き、普段着に着替えたエンディとエリスは離宮にある書斎に戻っていた。
「エンディ様。私感動いたしました。貴方様にあのような崇高な志をあったなんて」
　エリスは興奮冷め上がらぬ様子で、エンディを褒め称えていた。
　まあ、それも致し方ない事ではあった。
　国一番の変わり者が、自らの主である彼女にとって今回のエンディの成した事は、今までの自分の苦労が報われる思いだった。
「ああ、あれ半分位は嘘」
　ピキッっと、擬音が聞こえてきそうなくらいの勢いで、エリスの

表情が笑顔のままで凍りついた。
「へ？」
間の抜けた声を上げるエリス。エンディは続けて、
「だから、夢のお告げなんて嘘だよ」
「なっ！？なら、世界の平和を守るために魔神を討ち滅ぼすっていうのも嘘なんですか？」
エンディの胸ぐらを掴み、前後に激しく揺さぶるエリス。
エンディは右手の人差し指を立てて、
「いや、それホント。それ位の大義名分が無いと自由にフィールドワーク出来ないだろ」
「フィールドワーク？あの…もしかしなくても…」
エンディの服を掴んでいた手から力が抜ける。と言うか、呆然と立ち尽くしていた。
「ああ、フィールドワークのついでに世界を護ろうかなと」
心底嬉しそうに語るエンディ。それを見るエリスの瞳が怒りの色に満ちる。その瞬間には、彼女の固く握られた拳が、エンディの頭を叩きつけていた。
「痛ってー！何するんだよ！」
「どんな勇者ですか、貴方は！せめて、百歩…いえ、一万歩譲ったとしても逆でしょ！？普通」
激情にかられるエリス。エンディはそんな彼女を恨めしそうな顔でジッと見る。
「とか言いながらお前、歴代の守護者がどんな人達か知らないだろう？」
「えっ…いや、それは…世界を救った。とても立派人達です」
思わぬ切り返しに、エリスは慌て、取りあえずと、無難な答えを返す。
「文献を見るとかなり個性的な人達だったみたいだよ。買い物行くついでに魔神を封印したとか、釣りに行くついでに空間崩壊を食い止めたりだとか、気になるあの子を振り向かせるために二百年戦争

を止めただとか」
「なんか…ついでばかりですね」
エリスは半ば呆れた表情で溜め息をつく。確かに、実際の勇者が教科書どうりの清廉潔白、質実剛健を絵に描いたような人物…などという幻想を抱いていたわけではないが、もう少し真剣な動機でいてほしかった。
「つまり『ついで』というフレーズは守護者のアイデンティティなんだよ」
「なんか嫌ですねそれ…王様が訊いたら本気で落ち込みますよ」
平静を装っていたが、エリスの目から見ても一目瞭然だった。皆から後ろ指を指されていた息子が、世界を護る守護者に選ばれたのだ。その心中は、先ほどまでのエリスと同等、いや、それ以上だろう。
「まあ、まあ、結果を出せば問題無いだろ」
飄々と言ってのけるエンディ。何が問題かと言うと、この男がこういう言い方をする時は大抵、結果を出してしまうからだ。
「そういえば、今、気になったんですけど。エンディ様の口ぶりだと、自分が聖剣を抜ける事を分かっていたような口ぶりじゃないですか。でも、夢のお告げというのは嘘なんでしょ？まさか、ズルしたんじゃ」
目的の為なら、微妙に手段を選ばない男なだけに、エリスは心配そうに呟く。
「ん～ズルと言えばズルかな」
あっさりと、不正を認めるエンディ。エリスは慌てふためく。
「ちょっと待って下さい、それじゃあこれ偽物なんですか。それって、まずいですよ」
「いや、本物」
「本物？なら、何がズルなんです？訳が分からないですよ」
首を傾げるエリスに、エンディは事もなにげに、説明始めた。
「俺さ、昔一回この剣を抜いた事があったんだよ。若気の至りって

いうか…選定の間のカギの保管場所は知っていたからさ、忍び込んで、遊びで抜こうとしたら殊の外簡単に抜けちゃってさ。もう一度差し直したんだよ」
　照れるように語る、エンディ。エリスは諦めたような表情で続けた。
「あの…それって…いつ頃の話しなんですか？」
「五年くらい前。確か十歳の時だと思う」
「何故黙っていたんです？確かに忍び込んだ事はダメだと思いますけど、剣を抜いたのならそんなの関係無いでしょ？」
「別に興味が無かったんだよ。その時忍び込んだのだって、鍛冶にはまっていた時に聖剣の技術を参考にしたくて、忍び込んだだけだよ。その時、見にくかったから、抜こうとしたら、抜けただけ」
　そういえば…っとエリスは思い出す。確か五年くらい前は武具の鍛冶の凝っていた。それも、度を越して。
　国一番の鍛冶の所に勉強に行き、僅か半年で完全なものとした、さらに独自で編み出した技術も織り交ぜ、エンディの打った剣や斧は、その筋ではかなり有名なのである。
　その価値たるや、一本の剣で、家が一軒買えてしまうほどだったりする。
　ついでに、余談で。エリスの持っている細身のバスターソードもエンディが打ったものだったりする。
「…なんというか…それじゃあ、他の関係ない人が剣を抜いた可能性があったって事ですか？」
「それは無いよ。現にこの五年間。選定に挑戦した人はごまんといたけど、誰一人として抜く事が出来ていないだろ？」
「そう言えば…」
　長年、守護者の適格者が現れなかったため、選定の儀は一種の通例儀式となっていた。
　この儀式を受けられる事、イコールで騎士として王に認められた事を意味していて、いつの間にか手段が目的になってしまったのだ

から、皮肉な話しではある。
ともあれ、この五年間で世界中から現れた騎士たちによって執り行われた、儀式の回数はゆうに五百人を越える。そのいずれもこの聖剣を抜く事は叶わなかった。
「鞘に収めるのも、鞘から剣を抜くのも適格者じゃないと出来ないんだよ」
「えっ、それじゃあ、あの広い部屋全部がこの剣の鞘なんですか！？」
驚くエリスに、更に注釈を加える。
「違うよ。この城自体が鞘なんだよ」
「城って…」
「ほんと、大袈裟だよね」
ニヘラっと笑うエンディ。
（間違ってる…何か世の中間違ってる）
何が間違っているかといえば、こんな男がそんな大袈裟なモノに選ばれたって事だ。

幼なじみのお姫様。

観衆に見送られるエンディ達。
準備万端の二人は見送る観衆を背に旅立つ。
エリス（何が間違っているかといえば、この人がそんな大袈裟なモノに選ばれたって事だ）
るんるん気分のエンディ。横では大きくため息を吐くエリス。
エリス「それで…何処に向かうのですか？」
エンディ「エルダに向かう」
エリス「エルダ…ですか…」
嫌そうな顔をするエリス。
エンディ「どうしたの？」
エリス「エルダ…と言うことは…あの方ともお会いするんですよね…」
エンディは合点がいたという顔で、
エンディ「ああ…成る程ね。シオンに会いたくないのか」
ビクリと反応するエリス。
エリス「いえ…誰もそのような事は…」
愛想笑いで乾いた笑みを浮かべる。
エンディ「シオンって、何かとエリスに突っかかるからな。何でだろ？」
首を傾げるエンディ。
エリス（貴方のせいです！）
心の中で叫ぶエリス。

●魔法国家エルダ　居城

シオン「全くお父様にも困った物だわ」
城の廊下をかつかつと甲高い音を立てながら歩くシオン。その後

ろを付き従うメイドのミランダ
ミランダ「どうなされました殿下？」
シオン「この所立て続けに縁談、縁談、縁談、縁談…流石に嫌気がさしてきました」
ミランダ「殿下には心に決めた方がいらっしゃいますものね…幼なじみの…」
　無機質の顔のままミランダた喋る。
シオン「何を言ってるの！あんな奴の事なんて何とも思っていません。デタラメを言うのもいい加減にしなさい」
　毅然と言い切るシオン。
ミランダ「…私、幼なじみとしか言ってないのですが」
シオン「うっ…」
　どもり、顔を赤らめるシオン。
ミランダ「一体それはどなたの事ですか？」
　無表情のままのミランダ。それが更にシオンを激昂させる。
シオン「知りません。そんなの」
ミランダ「エンディ様―」
シオン「だから違うと言ってるでしょう！」
ミランダ「―から手紙が届いています」
　顔を真っ赤にして涙目のシオン。何も言わずミランダから手紙をひったくり、自分の部屋に入っていく。その時扉を強く閉める。
ミランダ「もう少し…素直になられればよろしいのに…」

●シオン　自室

　蝋印の押された封筒を開き手紙を読むシオン。
シオン「萌え…とは一体？また下らない事を調べているのでしょうね…」
　しかめっ面のシオン。
エンディ手紙の一文「追伸。数日中にそっちに行くと思う」

その一言を読んで、シオンは少し頬を赤らめる。

シオン「エンディが…来る」

エルダ編　1

●魔法国家エルダ　城下町

エリス「すっかり、遅くなりましたね」
　大荷物を抱えた二人。エンディは本を読みながら、エリスはその前を歩く。
エンディ「ああ、完全に暗くなる前に到着出来てよかったよ」
　本から目を離さずエンディはボヤク。
エリス「さすが魔導のメッカですね」
　周りの風景を見ながらエリスは呟く。町中には魔法関連の店が建ち並んでいる。
　その時、エリスは空から何かが降ってきている事に気付き空を見上げる。
エリス「わぁ…」
　空を見上げ、エリスは息を飲む。
　天を支配する小さな光が星のように薄闇がかった空に広がる。
　それは雪のように降り積もる光の粒子だった。。その、幻想的な場景にエリスは手を合わせ感嘆のため息を漏らした。
　この現象こそが、エルダを魔法都市と呼ばせる所以でもある。
　魔力素子が視認可能ほどの高濃度で町中を漂ってい。
　それは、ホットスポットと呼ばれる魔力の発生地点に囲まれているためである。

この国は他の国と比べものにならないほど魔法技術が発達しているのはそのためである。
エンディのいたバリスラン共和国が騎士の国と呼ばれる程に、武芸が盛んなのに対し、この国は魔法分野の産業を主にしている。
エリス「エンディ様見て下さい。とっても綺麗です」
エンディ「うん」
気のない言葉を返すエンディ。見ると例の『萌え百科事典』を熟読している最中だった。
エリス「また…それを読んでるのですか」
呆れた顔で、本のをのぞき込むエリス。
そこにはなにやら腕組みをした女の子が挑発的な顔で此方を睨み付けているイラストだった。その絵を見て、エリスは少し困った顔で…
エリス「コレなんかシオン様に似ていません」
エンディ「これは…『つんでれ』だって。」
エンディ「えっと、解釈は幾つかあって、好意を寄せている相手に素直になれない人物が、次第に―」
エリス（まさしくシオン様そのものですね）
苦笑するエリス。と。どこでエンディは本を閉じ鞄にしまうと、空を見上げる。
エンディ「エンジェル・ダストか。コレを見ると此処に来たって感じするな」
エンディは、穏やかな表情で空を見上げる。
エリス「これから何処に？」
エンディ「まずは城に。シオンに逢い行く」
エリス「いきなり…ですか」
エリスは引きつった笑みを浮かべる。

●魔法国家エルダ　城壁前の大門前、

警備兵1「止まれ！ここから先は許可の無い者は立ち入り禁止だ」
　無遠慮に通ろうとするエンディの行く手を槍で遮る警備兵。エンディは何食わぬ顔で、
エンディ「ちょうどいいや。シオンに逢いたいんだけど、呼んできてくれないかな」
エリス「ちょ…エンディ様」
　流石に慌てるエリス。
警備兵2「貴様！姫様を呼び捨てに！」
警備兵1「怪しい奴らだな。拘束する」
　槍の切っ先をエンディに向け叫ぶ警備兵。
エリス「あのすいません。少し話しを…」
　両手をあげ、エリスは説得を心みる…が
エンディ「ちょっと、待ってくれよ。俺はシオンに会いにきだだけなんだけど」
エリス「エンディー様！話をややこしくしないで下さい」

　その様子を遠巻きで、一人の女性が見ていた。
ミランダ「あれは…」

●城内　廊下

　ブツブツと独り言を言いながら歩くシオン
（久しぶりね…は陳腐ね）

　数分前、

　自室の事務机突っ伏しているシオン。
シオン「む～、いつになたっら来るのよ…あのバカ」
　コンコンと扉を叩く音。
シオン「入っていいわよ」

ぶっきらぼうに言うシオン。一応体を起こし佇まいを正す。だが、入ってきたのがミランダと分かると再び机に突っ伏す。
シオン「なんだ…アンタか」
ミランダ「まだふて腐れているのですか」
シオン「別にふて腐れてなんか…」
ミランダ「ご目当ての御方が到着しましたよ」
シオン「ホント！」
嬉々とした顔で立ち上がるシオン。がすぐに、惚けた顔をする。
咳払いをして、
シオン「別に私は誰も待ってなどいまでんでしてが。この忙しい時に一体どなたが来られたのかしら」
ミランダは呆れた表情をしながら、
ミランダ「エンディ様が到着しました。今は西塔の迎賓館でまって貰っていただいております。どうします。お忙しいのなら、後日、改めてお会いすると伝えしますが」
シオン「だっ、誰も会わないなんて言って無いでしょう。少ししたら向かうと伝えておいて」
ミランダ「かしこまりました」
部屋を出て行くミランダ。

そんなこんなで早足で歩くシオン。
シオン（会いたかったわ…なんて口が裂けても言えない）
シオン（全く、貴方はまた何を馬鹿な事を企んでますの？）
シオン（うん…これでいこう）
シオン「あっ」
エンディの姿が見えて、微かに顔を綻ばせるシオン。
エリス「助かりました、ミランダさん」
ミランダ「いえ、ですが今度からちゃんとアポイントをとってくださいね」
エリス「はい、ご迷惑をかけてすいません」

エリスが頭を下げ謝っている中、エンディはまた例の本を読みふけっている。
エリス「ちょっとエンディ様」
　さすがにその様子をたしなめるエリス。
エンディ「…うん…」
　エンディは不意にミランダに近づき、目をジッと見つめる。
　息がかかるくらい近い距離。さすがに、ミランダも顔を赤らめる。
ミランダ「あの、エンディ様何を」
エンディ「いや…この眼鏡っ子というやつを…」
ミランダ「ひっ…姫様」
　振り返るエンディ。そこには下を向き、ナワナワと震えるシオンの姿。
エンディ「やぁ、シオン久しぶり」
シオン「とりあえず…」
エンディ「へっ」
シオン「頭を冷やせ！バカァーーーっっっ！」
シオンの叫びと共に、エンディに向かい氷結の冷気が降り注ぐ。そして氷漬けとなるエンディ。
シオン「ふん！」
　シオンは踵を返しその場を後にする。

二時間後、

エンディ「ヘッ…ハッ…ブェクシュ！！」
　ソファーに座った状態で毛布にくるまりガタガタと震えるエンディ
エンディ「全く、シオンは相変わらずよく解らないな…何で怒ったんだろう」
エリス「自業自得です」
　よこであきれ顔のエリスがエンディのぬれた服を干している。

エンディ「えっ、シオンがなんで怒ったか分かるの？」
　驚いた顔でエリスを見るエンディ。
エリス「それは、乙女の秘密にしておきます」
エンディ「よく分かんないな」
　ソファーにもたれかかりながら、エンディは鼻水を啜る。
シオン「頭は冷えましたか」
　そこに再び、ミランダを連れて現れたシオン。
エンディ「いやぁ、体の芯までキンキンに」
　笑いながら言うエンディに、シオンは顔を顰める。
シオン「ふん。相変わらず巫山戯ていますわね」
シオン「でっ、貴方は結局なんの用でこんな所まできたんですか？私は忙しいのです」
ミランダ「ええ。エンディ様が来るのが楽しみで、今か今かとやきもきしていたせいで、公務が手につかず、仕事が山積みでございます」
　すまし顔で言うミランダ。シオンは慌てて訂正する。
シオン「ちょ、アンタ何言ってんのよ」
エンディ「ははっ、嬉しいな。僕もシオンに会いたいと思ってたんだ」
シオン「なっ」
　ボンと沸騰したように顔を赤らめるシオン。
シオン「私は別に貴方の間抜け面なんて、見たくもありませんでしたわ」
エンディ「ったく、昔馴染みだってのに冷たいな」
シオン「でっ、結局、何故貴方がここにいるの？手紙にはモエだの訳の分からない事が書
いてありましたが…」
エンディ「コレの意味を調べようと思ってね」
シオン「なんです…この訳の分からない本は」
　エンディはシオンに萌え百科事典を手渡す。ぱらぱらとページ

をめくりながら、怪訝な顔をするシオン。
エンディ「つまり、その本に出てくる女の子に似ている人を見つけ、その生態を観察して、萌えについての論文を書こうかなと」
　その説明を聞いた途端、シオンは持っている本をしたに叩きすてる。
エンディ「ちょっと、これ、異界の希少本なんだよ」
シオン「知りません！そんな事…女の子を観察って…ふっ…巫山戯てるんですか！不潔です！破廉恥です！デュラス王もよくそんな理由で旅に出る事を許可しましたわね…」
　そこまで言って、ハッとする顔をする。
シオン「まさか…前のように無断で国外に出てきたという訳ではないでしょうね」
エンディ「そんなわけないだろう。あの後二年間、エリス以外に護衛官が二人もついて四六時中監視される羽目になったからね。あんな窮屈な思いはもう御免だよ」
シオン「だったら、どうやって」
　エンディは腰から聖剣を抜いてシオンに見せる。
エンディ「これさ」
ミランダ「それは…」
　剣をみてなにか引っかかるような顔をするミランダ。
シオン「また刀剣鍛冶ですか。以外ですね。貴方は一度飽きた事には興味を示さないと思っていましたが」
エンディ「偏見だよ。それより面白そうな事を見つけているだけだよ」
ミランダ「姫様…あれは…聖剣では…ないですか」
　あきれ顔のシオン。
シオン「ああ、レプリカですか。以前作りたいとか言ってましたね」
ミランダ「いえ…そうでは無く…」
エンディ「レプリカならとっくの昔に完成したよ。そうじゃなくてこれは本物の方」

シオン「はぁ？」
エンディ「フィールド・ワークをするために、守護者として魔神の完全討伐をする事を約束したんだ」
シオン「何を…そんな世迷い言…」
　心底驚くだがあまりにもあり得ない状況に怪訝な顔をするシオン。
エリス「あの…ホントの事なんです。選定の儀で聖剣を抜いてしまったから、もう国内はてんやわんやの大騒ぎで…」
エリス「あの通り、興味を持ったことを知るためには手段を選ばない方ですから」
シオン「五月蠅い。それ位分かってるわよ」
　シオンはエリスをキッと睨みつける。
エリス「ははっ」
　愛想笑いで誤魔化すエリス。
エンディ「そう…抜いちゃったからね…あんまりのんびりもしていられないんだ」
　突然声のトーンを変え、真面目な顔をするエンディ。
エリス「どういう事です？」
エンディ「聖剣の封印を解いたという事は、対となる七つの宝珠の封印も弱まったって事なんだよ。早く適合者を見つけて仲間になってもらうのが一番なんだけど…それが出来ない場合は封印…最悪破壊しなければ悪用される可能性がある。だから、まずトラバルの遺跡に行く必要がある。今日ここに来たのはあそこの調査許可を貰う為でもあるんだ」
エリス「でも、宝珠は適合者しか扱う事が出来ないのでは…」
エンディ「聖剣（コイツ）と違って、あれはエネルギーの結晶体だ。それだけで強い力を発している。本来の固有技能を利用出来なくても、殲滅兵器の動力としての転用する事も出来る。実際、大じいさまの時はそんな事もあったらしい…その時は地図が書き換わる程の大事になったらしいけど」
　ガタンと、椅子が倒れ大きな音がする。

シオンが突然立ち上がった為だ。
シオン「…っ」
シオンは立ち上がったまま動かない。だが、その表情は何かにお怯えるように震え、顔面蒼白になっていた。
エリス「シオン…様？」
怪訝な顔をするエリス。エンディは悲痛な面持ちで、
エンディ「ゴメン。少し無神経すぎた」
震えるシオンの方に手を置くエンディ。その瞬間、シオンの方がびくりと震える。
エンディ「大丈夫。あそこには…俺だけで行くつもりだから」
エリス「ちょっ…何を言ってるんですか！私もついて行きます」
エンディ「でも危険だよ。そんな所に女の子を…」
エリス「私は、エンディ様の護衛なんです。それがエンディ様の思いやりであっても、私にとっては侮辱に等しい行為です」
エンディ「うん…そんなに言うなら…でもホントに危険だよ」
エリス「尚更そんな所に一人で行かせられません！」
固まったままのシオン。ミランダは心配そうな顔で、
ミランダ（シオン様…まだあの時の事を…）

エルダ編　2

●エルダ城　謁見の間

　エルダ王、ライルの玉座の前に跪くエンディ。
ライル王「久しいな。エンディ皇子。驚いたよ。君が守護者に選ばれるなんて」
エンディ「私自身、戸惑っている所もあるのですが…今だ、各国で魔神の影響と思われる事件が後を絶ちません…後顧の憂えを絶つ為、父祖の悲願でもあった魔神の討伐を成すことは我にかせられた宿命と考えています」
ライル王「そうだな……」
　沈んだ顔をするエルダ王。
エンディ「アレは…私の責任です…私が至らなかったばかりに」
　悲痛な面持ちのエンディ
ライル王「言うなよ…君はまだ子供だった。何より君を勝手に連れ出し、危険にさらしたあの子の非礼こそを、私はデュラス王に詫びねばなるまい」
　悲しみを滲ませるライル王。
　エンディは頭を垂れ、床を見ながら、
エンディ（リアナ…君はどうして…）

●エルダ　街の入り口

エンディ「行くよ」
　荷物を担ぎ、エリスに促すエンディ。腑に落ちない感じのエリス
エリス「あの、今から向かう遺跡で何かあったのですか。昨日のシオン様の様子はあまりにも…」

エンディ「そうか、あの時エリスは静養中だったから同行しなかったんだよね」
　エンディは目を細め、思いふけるように、空を見上げる。燦々と輝く太陽をまぶしそうに見る。
エンディ「あの日は曇っていて…今にも雨が降りそうな…そんな天気だった…」
エンディ「もう…七年になるか」

●エルダ城　シオンの寝室

　ベットに仰向けに寝転がり、フカフカの枕に顔を埋めている。
シオン「お姉様…」

●回想　シオンの姉、リアナの回想　七年前

シオンモノローグ「お姉様は強く美しく、何により優しく。私にとっては全てを照らす太陽のような方だった」
　新鋭隊長と剣を交えるリアナ。鍔迫り合い…、切り返しの一瞬を制し、相手ののど元に木刀を突きつけるリアナ。
シオン「凄いです。お姉様。これ」
　姉に尊敬のまなざしを向け駆け寄り、タオルを渡すシオン。
リアナ「ありがとうシオン」
　笑顔でそれを受け取り、シオンの頭を撫でてやる。

シオンモノローグ「尊敬するお姉様。私の自慢のお姉様」
シオンモノローグ「だけどっ」

リアナ「エンディ」
　姿を現したエンディの元に他には見せない、うれしそうな顔で駆け寄るリアナ。

シオン「あっ」
　仲むつまじく話しをする二人。それを呆然と見るシオン。
シオンモノローグ「心の片隅では嫉ましくも思っていた」
シオンモノローグ「そんな事を思う自分大嫌い」
離れた場所から、シオンを呼ぶリアナ。シオンは愛想笑いを浮かべ近づく。
シオンモノローグ「お姉様の影でしか…いや、影ですらない。お姉様（お日様）を煩わせる（雲）邪魔者でしかない私」
シオンモノローグ「そう思うと、空しくて…怖くて」
　そして思い出す、あの日の事を…
リアナ「ねぇ、シオン。エンディの事どう思ってる」
シオン「私は…別に…なんとも」
リアナ「私はエンディが好き。大好き」
シオン「っ」
　そう……私は…
　昔を思い出し、涙を流すシオン
シオン「私は…卑怯だ…」
　そのとき、シオンは身に激しい倦怠感を感じる。
シオン「あ…れ…」
ミランダ「貴方が思い悩む必要など無いのですよ」
　突然現れたミランダ。シオンの耳元に優しくささやく。
ミランダ「眠りなさい」
シオン「ミラ…ん…だ」

そのまま、シオンは意識を失う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2432v/

セブンス・ブロード　萌えの探求者

2011年11月3日08時17分発行